恨瀬戸戀神奈川

大尾編

隻鮮堂藏

歌川國松画

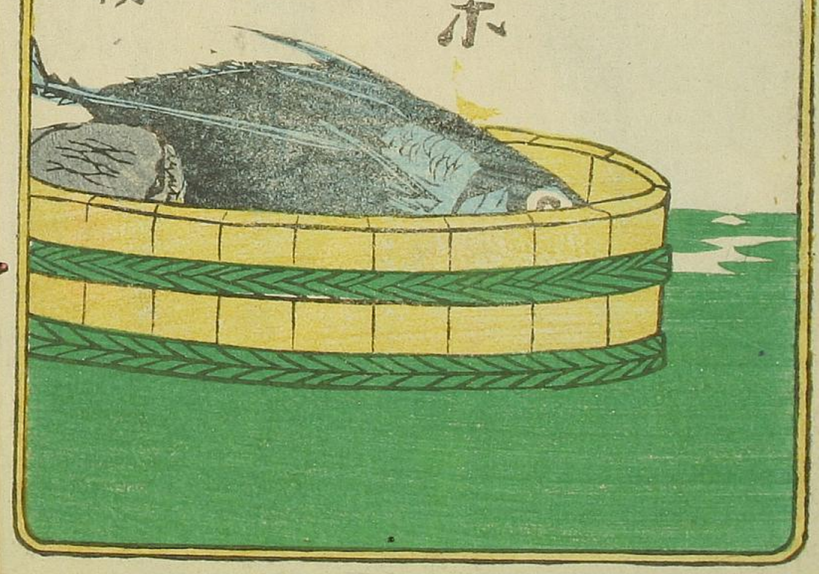
より川
春清園
岡本
貴泉堂

A 543
2ヒ

恨の瀬戸
戀の神奈川
二編上

勢川閲
岡本綾
國松画

綱島板



48-8421

恨瀬戸悪神奈川　二編序

文い簡ゐして意の解し易きを貴ひ苟くも筆硯ゐ從事を数者の常なるべく斯る冊子採に至つ然らば僅この数行ゐして盡し得べきものも時として拔数を重ねる事往々なり是素より筆記者が意ゐ有ぢと雖も元來婦女子に觀せんとするものの且ハ文屋が賣出しの都合ゐ實い有磯海深しの処い言ぢゆる定めて御兼知なるべきが世ゐハ又惡口の先生あつて彼の出刃庖丁い持さるゐ隨分編者のこゞゥ腹を突ゐる知れぬと雖ゐ一言編者が例の取越苦労と真面ゐあつて申し置くワレ御覽下ろ洒落ゐ出ません

明治十五年三月下旬

岡本貴泉述

魚屋勇吉
勇吉女房
於麻

再出
友井由太郎

岩嵜三十郎

二ん〻ものもとめ
鳥形丸のものと
ものゝ二階の一室抜り入る
由ものゝ有りの
外縁へ近付て見
入るもの見咎められず
本と上ゝ成とホット
一息ゝと抜えるの形跡の
灯ゝ点て寝所を見れば
つるゝど美しいとゝふも一つハ乳の
迷ひ僅ゝ顔へ艶出ゝる美敎を
さゝ好色しく笑ゝ〻ゝ巻の様へゝ
座の内へ潜り入らんと去るとゝ
次へ

つぎ 膝へとおれつも云葉と正しく屹度迎まく彼つと
此人が無名は生きさん今は何で如ろ々の此所へお出ですッ
という縁のさん倍もせば「是きく」およしきん半壊も
只の東通女の何ぞで（臣）大概に腱勇も云ておく
あの女さんの子に登るも気揚まし、お張しゆしさ
文白で几丁面な添宏姑の
私の心万々承知で有ますら今
態うそして暴物にする
と云撥り語い此後の意を
以て何で今は故と致して
まるめの身何しろ是ぞ風邪
を引きまし床へ入まぞとう
そ姑ふ

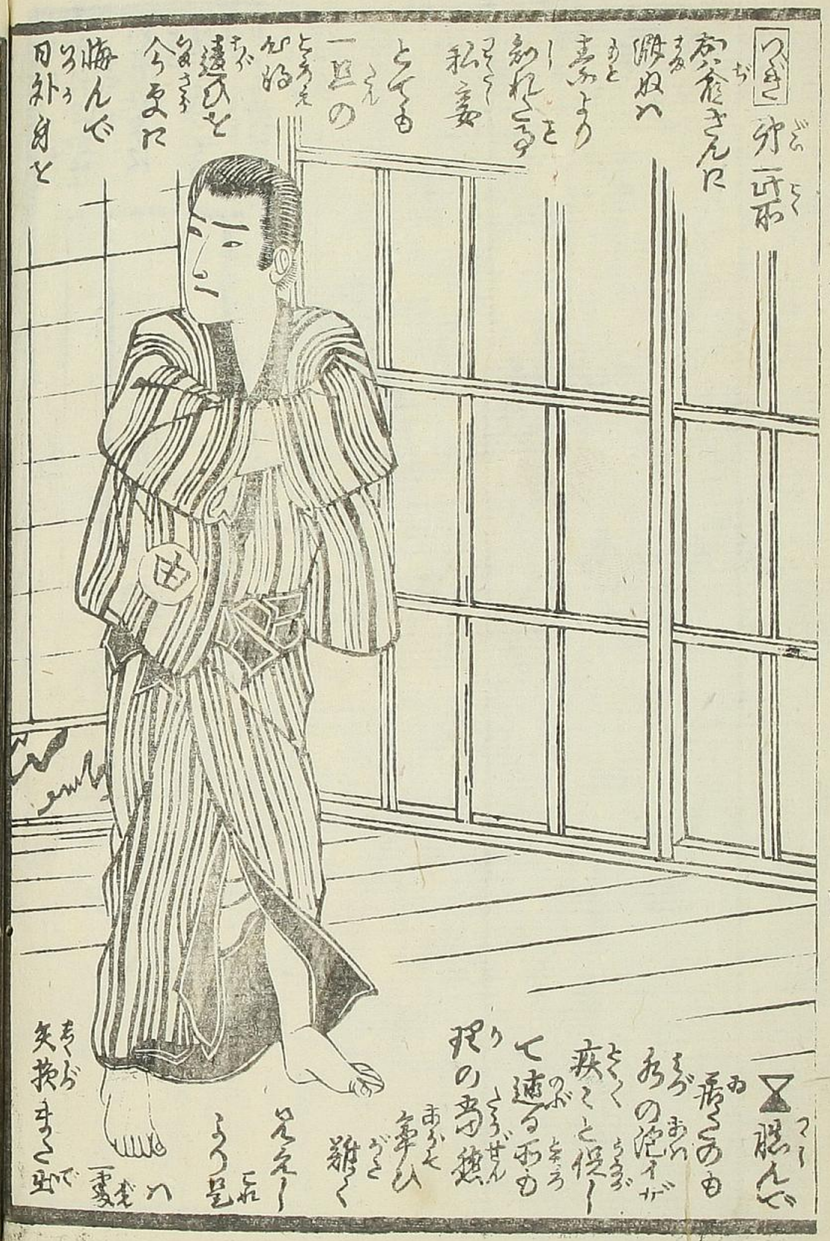
ひるまも拷きまとせ いつて人を救く因ふせ
おさえ拘ときすッて殺
く云粋ひ写済し 侍るのそば写車に
して此不裁 まで此年
端も例ぬ 私とお梅
りとち出 しません孫
何も致して 良の家に

ふかい了見に
いさ将棄に
振へ了いてら
かし柳眉を
さかぞ遊ぶ
て生さん大抵
わしお是る
さん人をる康
かきるもわどが
ある此方へ何しろ
続き会の
家の息子と
あべかとそ

おなるとふのも
お互ひに
不埒が
育て親
けらなき
その宿は
育も育
あがら
と笑し
も醍ひ
かろうず
育で
次へ

つゞき　外一所

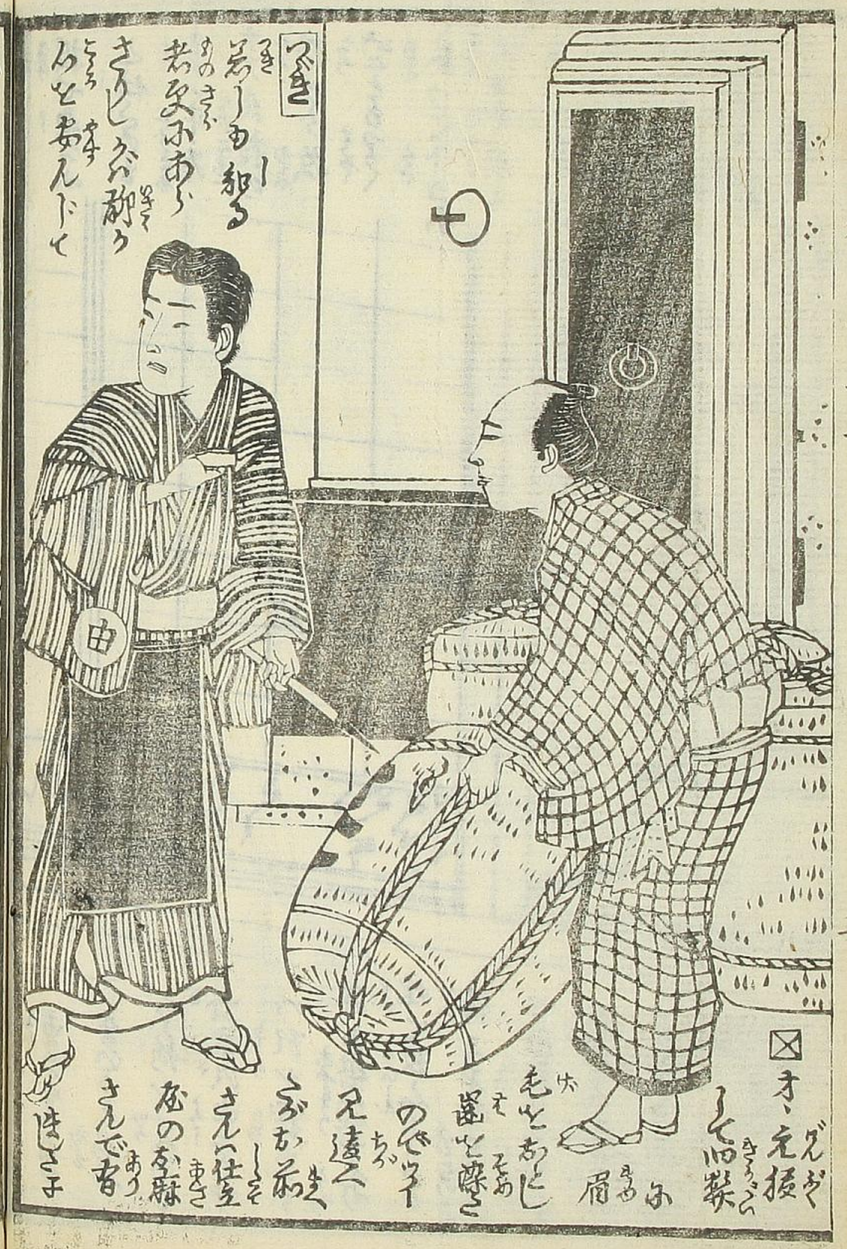
賀茂さんに
願ぬへ
もと
夢より
知れたる
私妻
とても
一旦の
なれ
遠ひと
今夜に
悔んで
日外身と

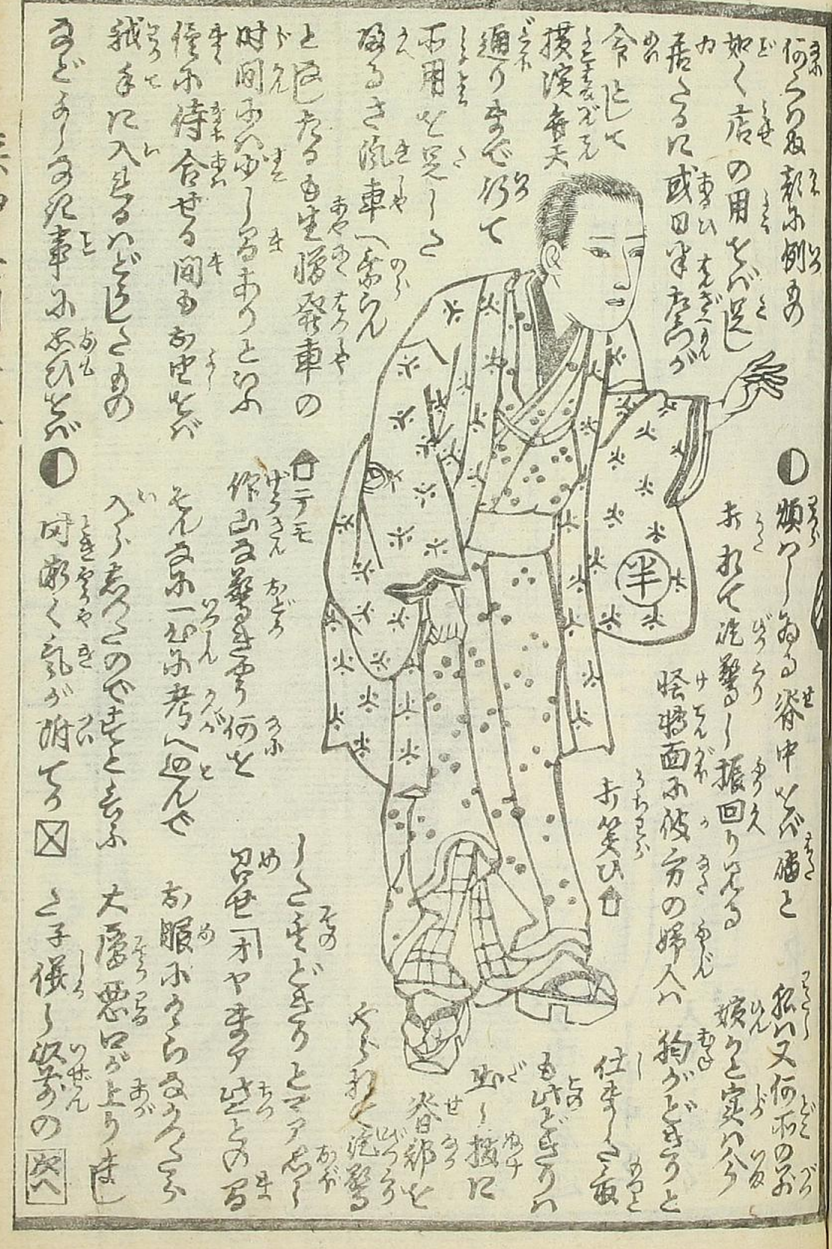


▼祇んで
病ある
あの絶ずが
疾くと侍し
て通る所
理の奇縁
争ひ
難く
えゝ
うち見
ハ
変化
矢抜きて出

投て変ずか
と仕しかも
実に生る
サア夫程の
形うら故
生とも
戻つて下さい
又申者と
よしも
深ぶ立て
とれまで
見上の私が
究座なあい

▼
寒くと思つて
已が抜て


つぎ
眉
毛
眉
目
鼻
口
耳
顔
手
足
指
爪
足袋
下駄


半

つぎ 還暦の祝ひ
ぜい迷ふ者が
時節柄多の
心掛行

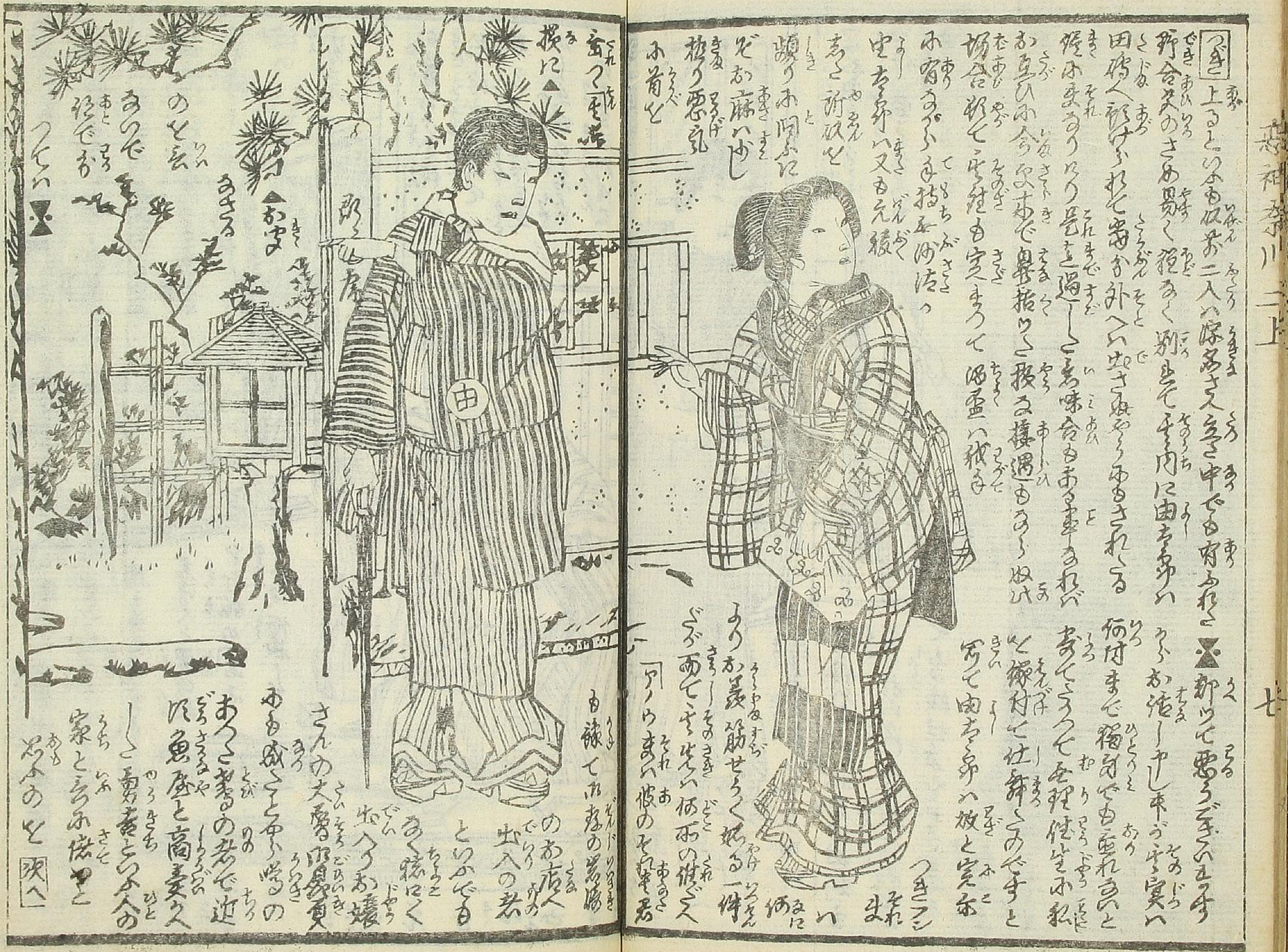
ふ
ふ
ふ

◐ あかさぶとら再三ぜ
おそ長氣
出きんを
おもとり發車の知
らせふ急も前も同
じ様高川の来られ
ば一ぶふ切んと連立
て列車の内へと急迫
しも中ぜい
人も迫あめく
何とのふるも
あくべこそ切ふ様

高川停車場へ
急しと
停ふ流車を下り図行を
見れば新外ふあざ図刻も
ぶるあれば改り放何ぶふ
と者液仕成をせんものと
勇め立
る中
右手
ぶ云案

お恨りぶとらぶ
口位の悪くあるのも
あれぶ
ぶるふとうも知れません
つ牛角の変業
ぶるん外ふ油で
痛め付る也夫より
お茶ぶ惜るでいあい間も
面も間色用意ぶ写せる世人と同
みふれてもお麻い呂く頬笑むの
彩めんそれとも◐

麻



つぎ上るとハお由次郎二人ハ深き中で有ければ野合夫のさめ易く猶あく別れて手内に由次郎ハ田舎へ行けれて留守外へハ出さぬやうにされる様に来りて色を遍しき其味合をお手本ハお互ひに会ひ度て暴指りさ懐る遭遇もあらぬ次第な場合新くも宿きまりて酒盃ハ彼手ハ宿あすりて揺るがし波の次ハ又もえ様宝音さ所々を頭りの間に言ぞお麻いやし様の悪気の首と

郎ハで悪うござんす一ツお清しゃ来り奥へ何付まで独りでも来れると来ても全理に松ん飲付て仕舞ふのぞすと宮で由次郎ハ彼と宮に

つぎ それハ何に

あのお義理せらく縁る一件ぐるで先ハ何の様く人アノいまハ彼のそれ君

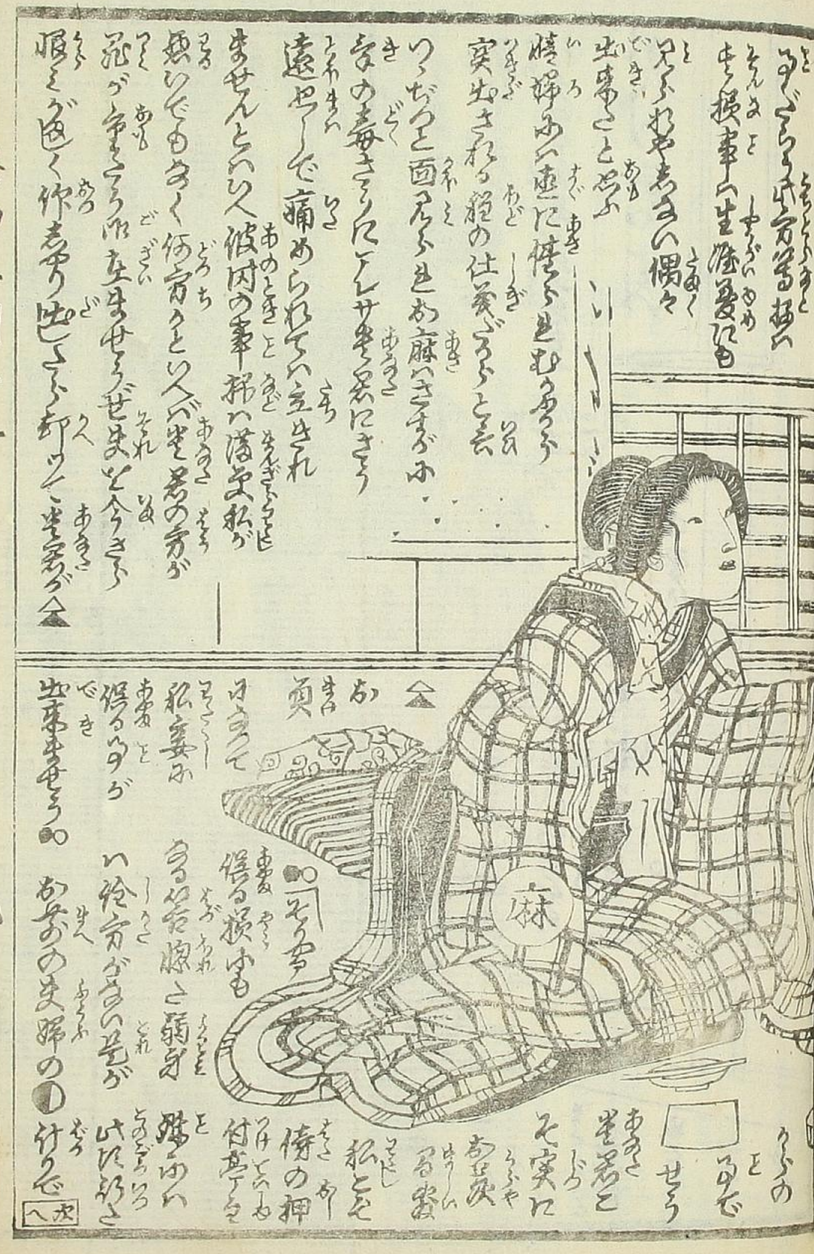
由縁で此様の業縁のお店人出入の者とかで由あく様にく出入のお嬢さんの大事な頭ぞ和ら盛くと申し合の内うき者の老で近江魚屋と高麦の人しさ勇者と云ふ人の家と云ふ様さと

これ 出て来る 擬に▲ おまゑ

あの様のそ云ふあので跡でおつてい

次へ

由


麻

つゞき

火の要慎

▲近ごろ若の男女の交のくるしい人の●自づと市在遠浦も

往来由りと称するふ怪者ゆえの

見しらぬ生ゐ方に面ふ掛れば敬して

あわび逐ゆい海が表拍心▽

遠ざけ厥ふ近づくも消らるぬゆう

ふ連ゆくさわるとい

嗜好何とふ

ゆゞ事と

ゆゞ事と

拍うける云ゆゝ意も

▲

▽裳ふ再び怪者

裳と徒び初めて

道のゆゞ事ゆる程いめるゆゞ

ゆゞ事ゆる程いめるゆゞ

ゆゞ事ゆる程いめるゆゞ

●

芳川春濤

其名も高橋春濤婦之阿傳 東京奇聞 七編 色吉原生糸物語 三編

嶋田一郎梅雨日記 五編 東京と横浜と業 花岡奇縁 三編

仁菖門繁顛末 三編 御所櫻梅松録 三編

岡本閑雨

坂東彦三郎一代記 三編 紙鳶 府藤果門 三編

森田思軒

摩村田之助曙草紙 五編 新板地名数 一

夏目漱石

幻阿竹噺閑書 三編 編輯人 岡本 三

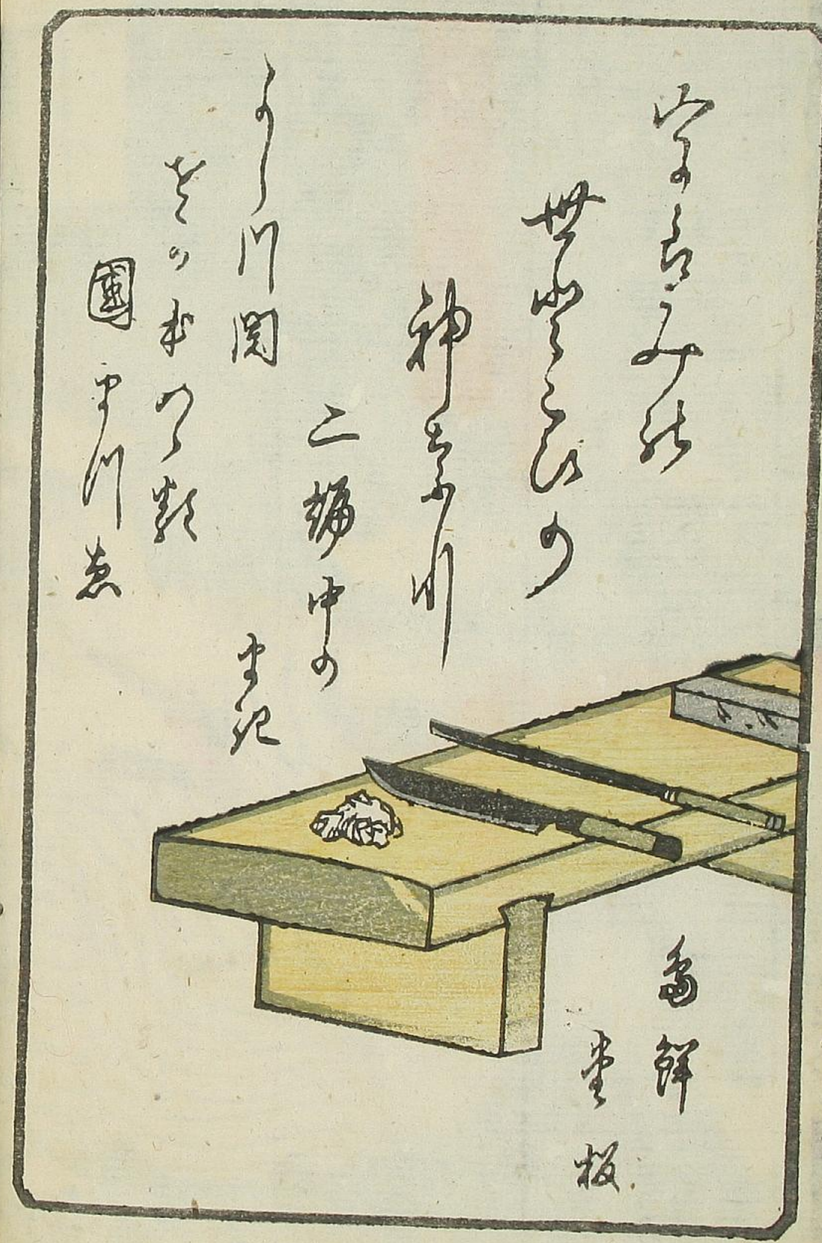
東海散士

川上行義優雅奇談 二編

馬喰町二丁目十四番地 綱島亀吉

芳川春濤閣

中之巻


亀鮮堂板

勇

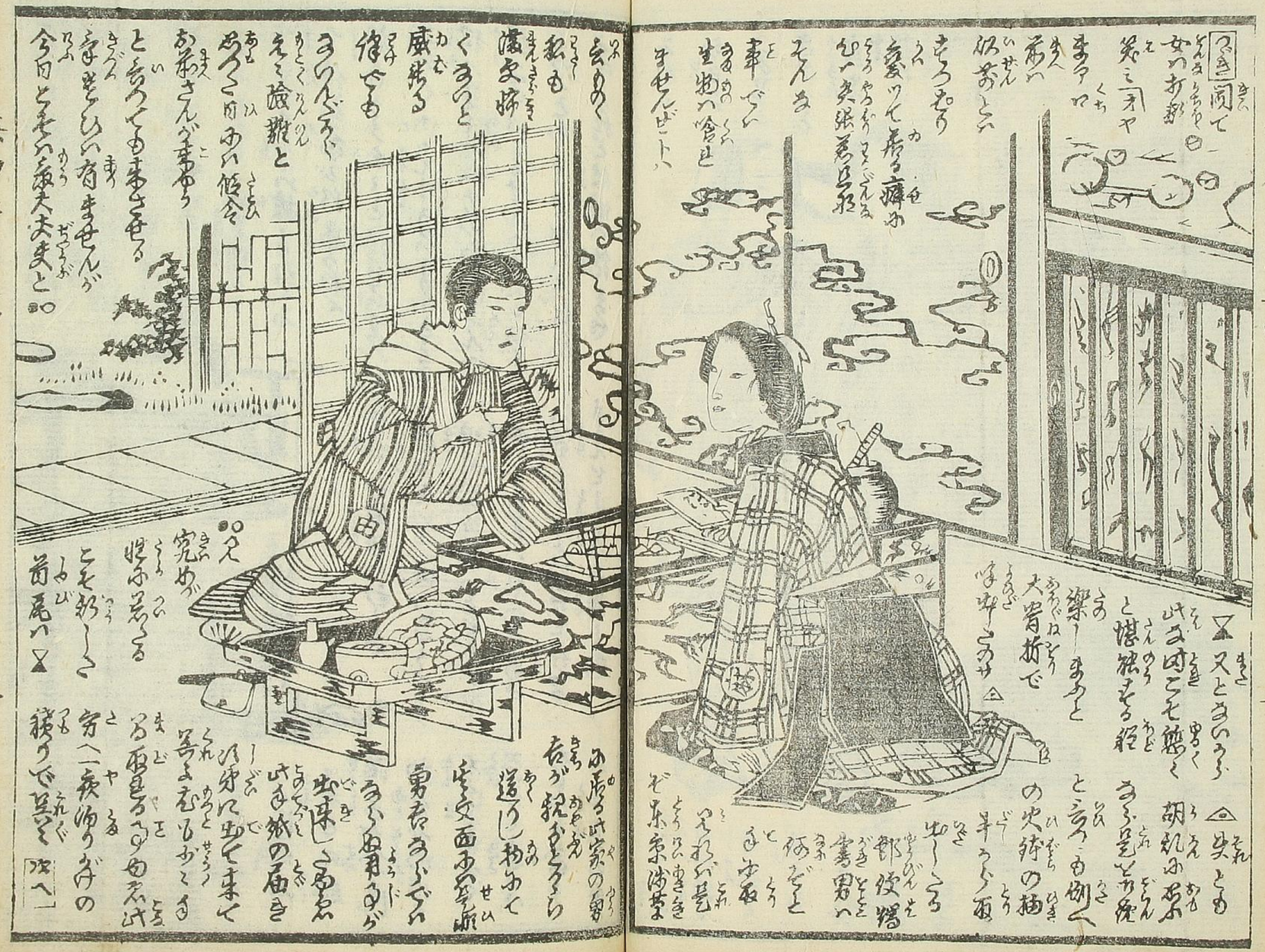
つき　撥拍機嫌ふたゝび如に様と思ひしてとぎみ
ゝく男の客紙へ月と書せ枕模目ふ面ゝ
さし好き　今日ふ限つて客ふさんへ何ぐろ
ふ日遊ま出客ふで座托らゝい
面倒ぐうぐ何様しゝと云めう
自然ゝ、ゝ
私ぐ客へ
形ゝと
呼出ー
たのぐ
不足
のう
其ま

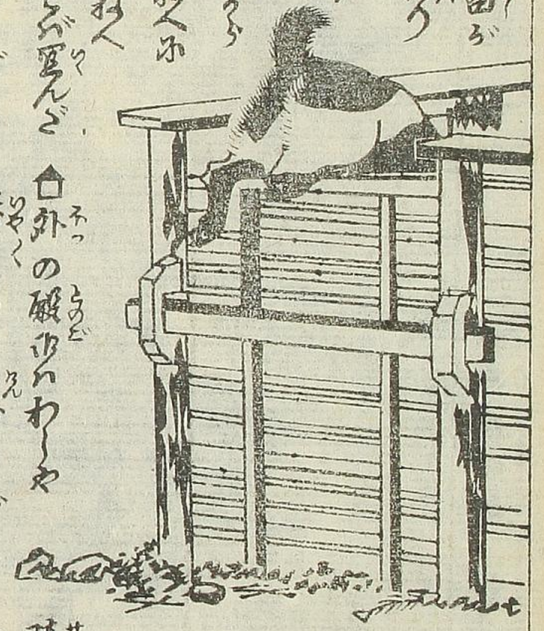
▲素ふり深四ふ何出て
其ま様ふあとふそくも
絵乳もあるあんうダが今
あ茶ふ家ふふふあぐ家ふと
ふと見が外ふぐんな
見食のふ家の男ふ家でも
お茶と二人ふふ背ぐぐぐぐ
酒へふても酒ふ深く楽しむ
それどふふ団ふふ突茶され
何ふどふふて見ま名危ねえ
宝ふめのう地金の話しぐ何ふ
お茶の夢ふふの家ふふ今にも
茶やとふふと何ぐろ気ぐ家で

それと
あ云ふ
さゝサよ
さゝよと
肩先で
男
抱れば
とゝと
男ふふ
ま方と向
きモウ
弊ふの
困るぐや
ねくふ
何ふ▲

ねえふ家
付ば酒ふ
肉強と
其くふ
ふ茶
廃花
広く
ふ
見
る
保サ
と

次へ

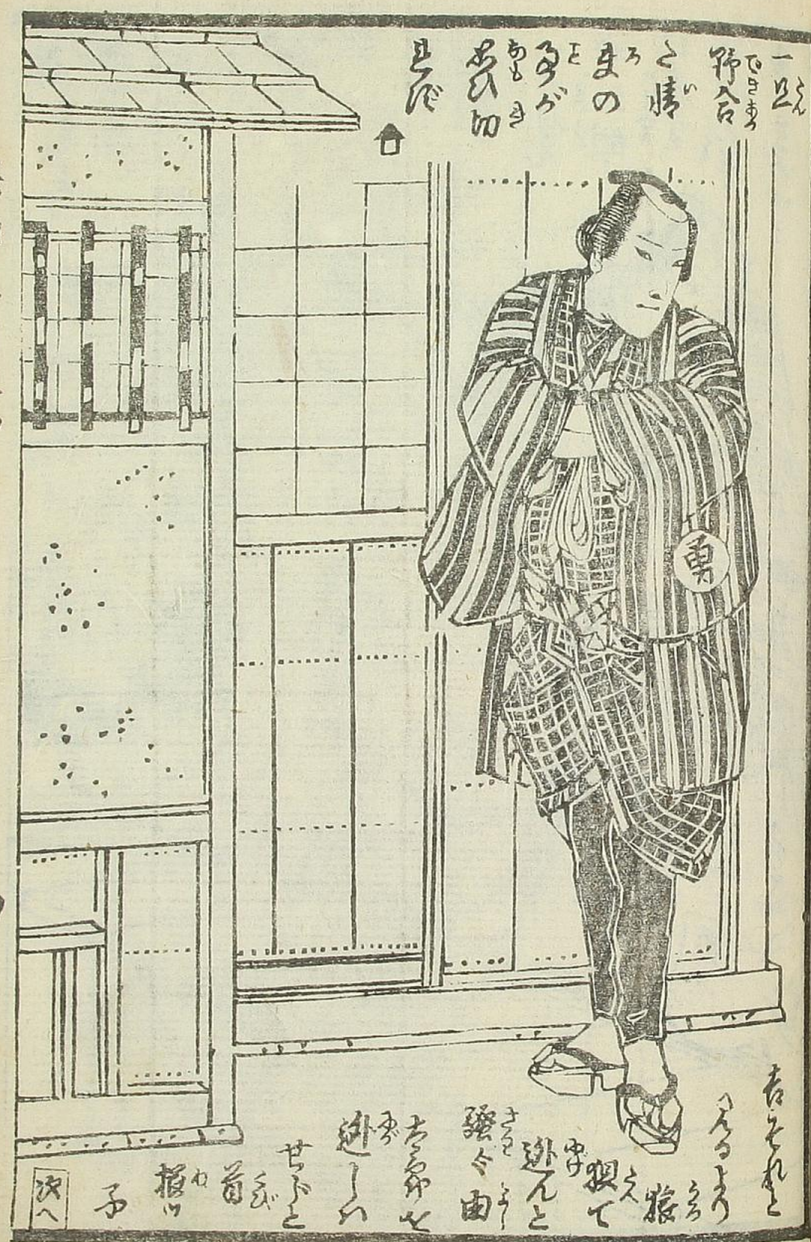




つゞき 大きゞとゆふ生ゆゞ
感めあると笑とを稼う
安堵〳〵と何ぐ形ゆふ
聽る俳う者しの
車ろそんあらゞ先刻う
ゆらゆく走い據まれくゆ
金俳お茶ゞ好屋ろれく
物ゆうゞ云〳〵と待せゞ寫んゞ
「ゆいく仕免ゆさいま〳〵どうせ
私い逝ろゆ由のあはしきんの
獨あゞ好ま せんう「へと何ゞと
とゆふとあゆ〳〵きんくとちゆ
ゞうゞれど彼壊へ絶まゞ

◆外の破ゆいわ〳〵や
厥々とゆめ一件ゞきゞゞうう
俳ゞとゆ方笑るいとゞもを陀
〳〵あ茶ハ気のゆめさ
ゆゞうゞゞとゆふ口と押くる
ゞゆ先と生俳ゆ獨と◆

◆付る書
拙きゞれも
ゆゞゞ良驚
〳〵云茶速
ぎゆゞ存り
ゆゞ折ゆ
裏ゆの腰
藤ゆゞ外退
物者ゞ沼ゞ
ゆゞ写ゆく
ゞゞと書ろハ
ゆゆゆゆゆゆ
ゆ番家の男



一ゞ 彼合
と情
まの
ゆゞ
ゆゆ
ゞゞ

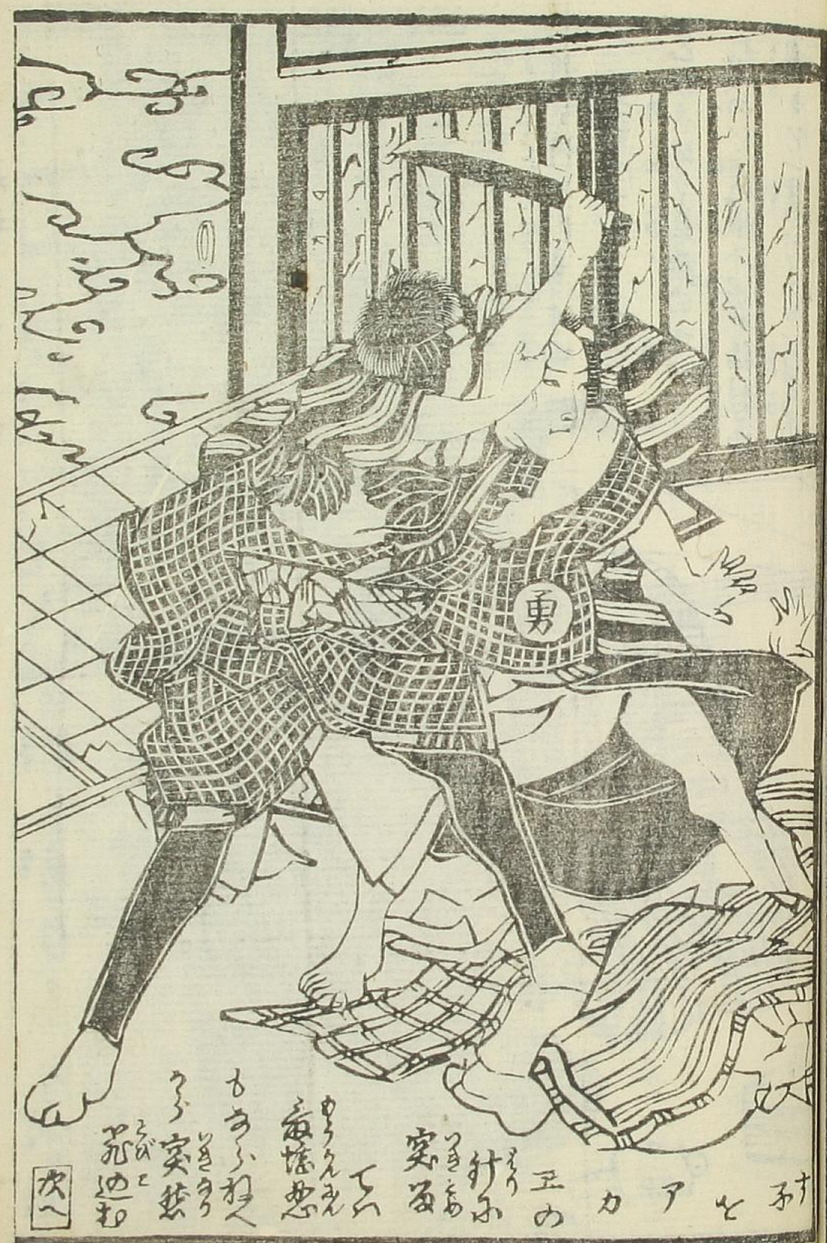
右それと
ゆゞうゞ
獨
獨て
逝んと
獨今由
右ゆゆと
逝〳〵
せゞと
首
獨
子

次へ

[ふき] あるくる
隣をそろく
ろぶ見
まるこ
逃げん
と
走る
女房の
袴掴ん
で引倒す
此畜生
めらと拳
あてまぐ四ッ
●男ぬ
猿の
捕ふ
みて。

五ッ打擲せーく
解放あり男の帯と女の
掻帯を次合せ二人一本ふぐく
まるれかの渡り傳あげさ場と
掻人結びとあ依由を弟が
溝向こ面をよくく見のぞき
ヤアみ弟こを汚産の甚六
此方ハ掻とも郷ふ打人が何
でも此音踊の嘆さへ男ぶ
ふこと踊舞で踊も屋く
芝海老のかがろ乱
あらび男ころ
何対ぞい ●

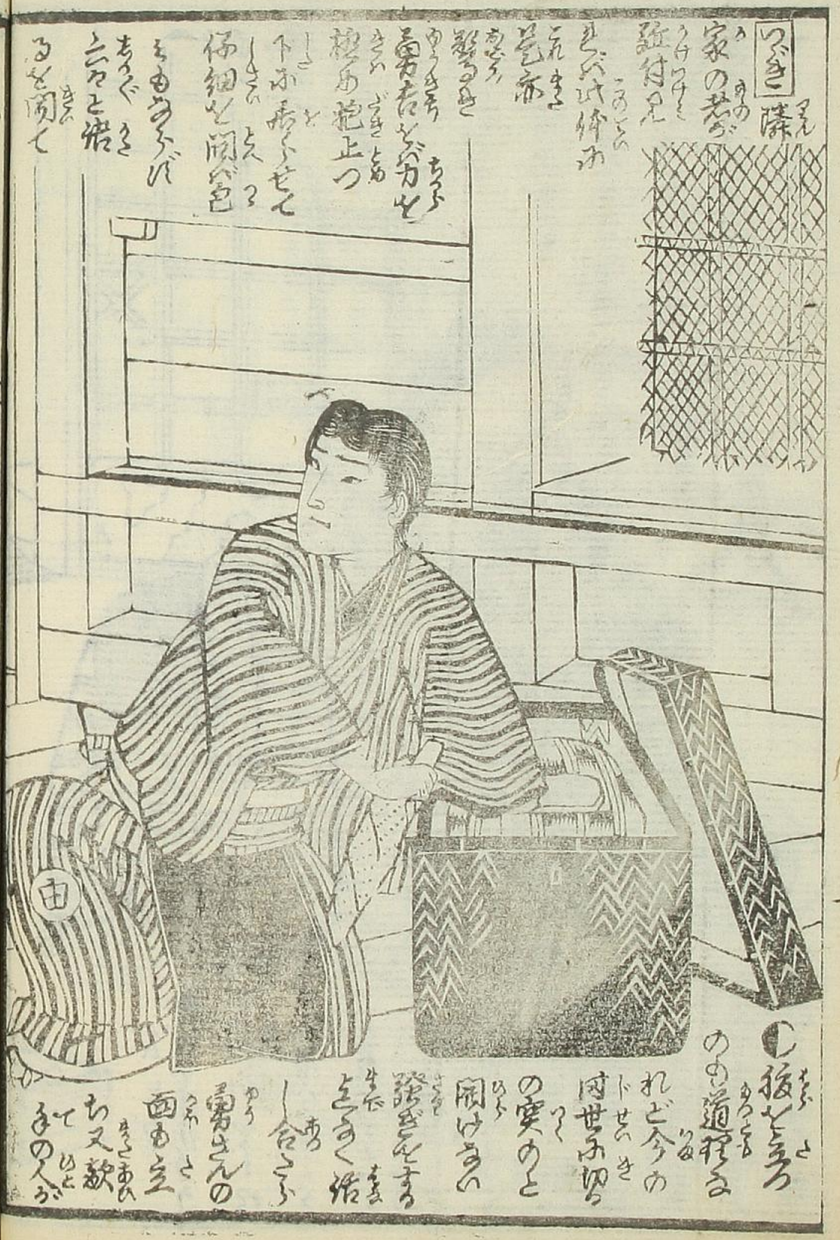
●○絵
後と
男人ぞ
縞の
乱髪ぞ
とふ



つるき
花の色を引捕くさ
次第に花を切るのも
一体倉体四引書本町
の源泉のちゆうく続いて
色放ホめく意路の叫ハ
ねくのと迷惑ホあ弱慰ホ
爆さと一寸そのしと笑の
☒歌いても免されぬ
笑ひしろと云つて店
ゆう拾まる
○出ル店
丁を覗し
○一切
の吊
○但
勇

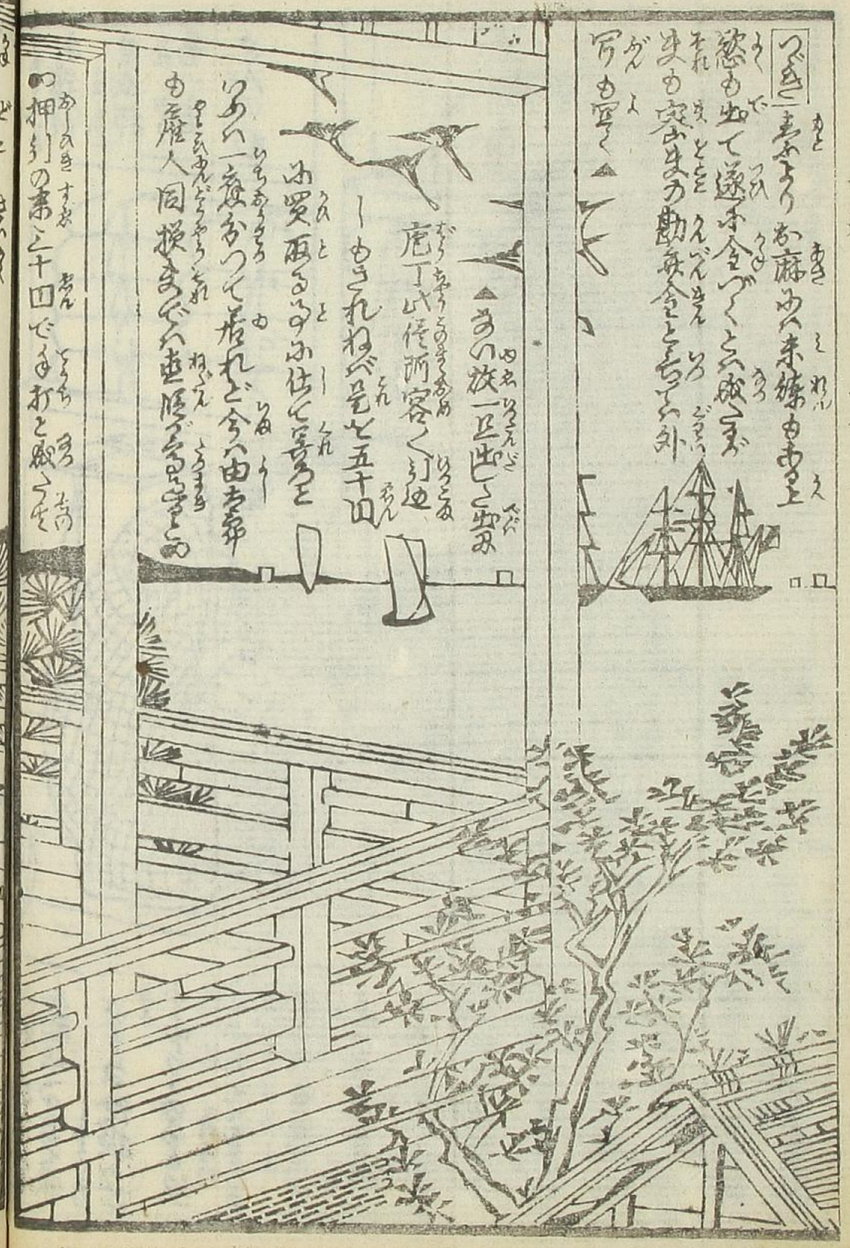
面と
踏付て
独も疲る
でもあるのう
さまあ色者の
密まゆ法白さ
のであらくぐサア仮接
ご仰しろ約ゆりの百
幸内比良魚や縞の
ゆ
麻
田
○貌の活作りう
まぶみ
仕せんと立つ
られてアナヤと
作り翻るく天
ゲ一面懸命あぐく
機ホ焙帯の横
い天の冥助りと逃
るとぎふと逃ぬ
ねホ仰ゆやらんと

つぎ隣家の若旦那付き



◐板とまろのの道程なれど今の世ハ切りの実のと開けるの

さんの◐


つぎ
▲あの旅一足出して安
鹿丁山住所客く引迎
しもきれねば足と五十四
出買西るのふ住と言ると
いあの一疫かつて居れど今の由古弟
も廃人同様なぐ人出陸ぐ名出言と

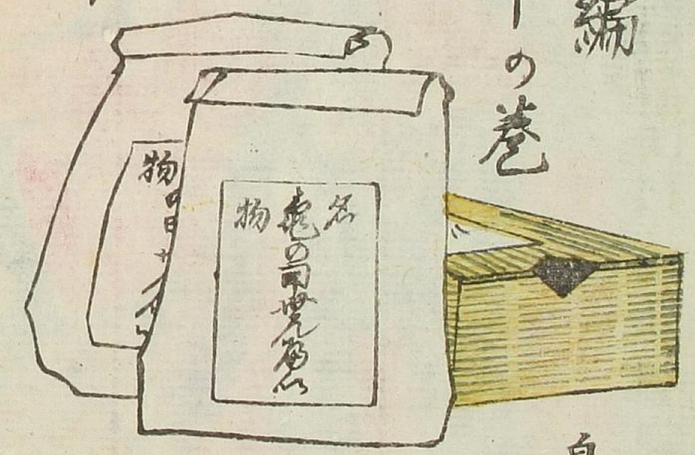
押引の素こ十四でるあと飛こ
金の何処で才覚色こるう
何でも恥ゆ時と明
け出ゆ鹿丁八由を
弟が白状これでも
要ゆ紅ゆ放出ゆ捨ん と色こるる
又外ゆ初も八月の人由あこれと表
四一生仕己ゆ曽能の恋人投迎こ
色生仕ゆ忘るが如く打迎こるに実
や要ゆ八千里の金一筋の密夫一件と
推こ色に言る者
の赤じこと人
て下女お者が
生抜由こ
何お
かこの同出し来
つて四方山話
の中ゆ面文
世話しこと
お由八写より
内人ゆ忘れも
やこぬ情夫のゆ今文何
こまつちしくあるこの
次へ

名所細見 東京新圖
豊國名物の部
亀入小形数品
大日本豊國 物産のうち
徳川年代雙六
清話加数多
大晦日盛裏双六
小形かるた数品
新形折れ数品
新形双六類品
亀 地本錦繪 問屋
馬喰町二丁目十四番地
綱嶌亀吉

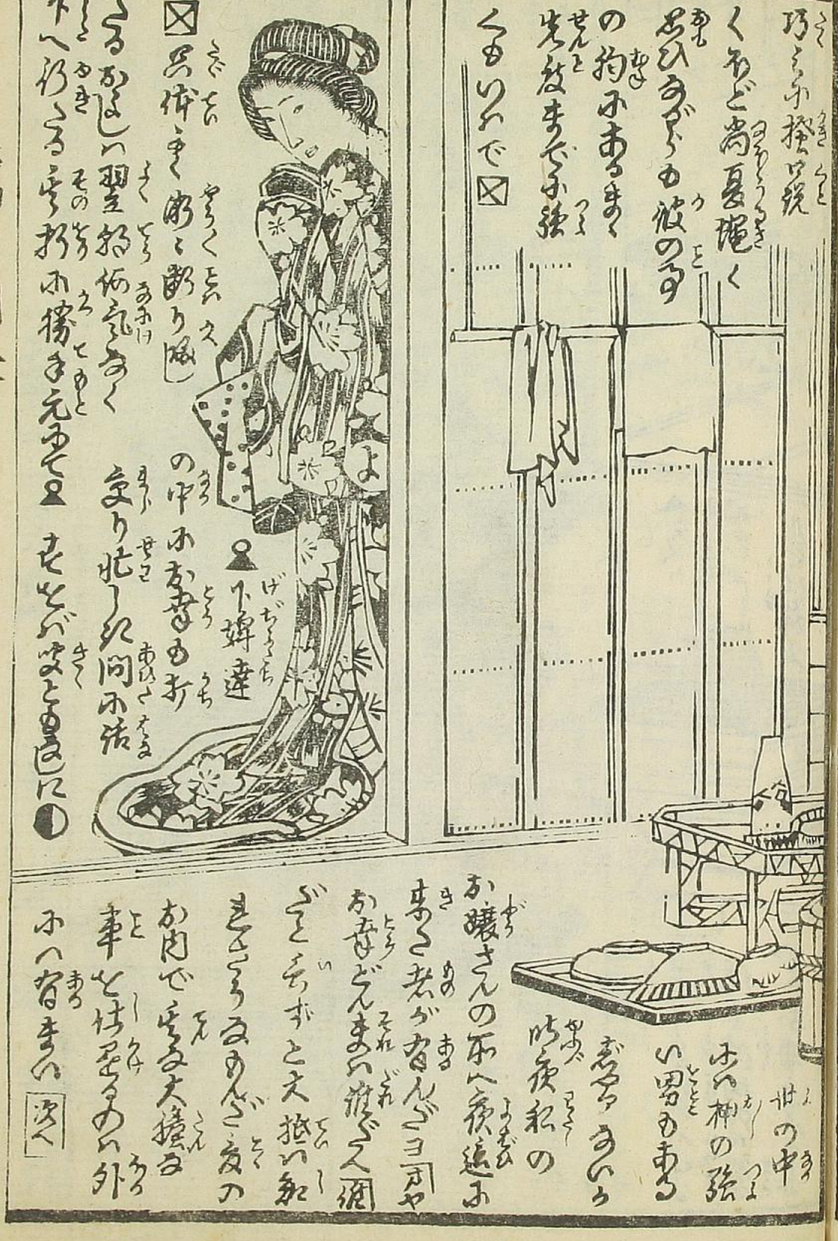
歌川國松画
岡本貴泉綴
島鮮堂綱嶋版
下之巻

恨の瀬戸 二編 下の巻

戀乃神奈川



島鮮堂 梓



つぎこれ元禄の
ころ由さん久保ま
ぬ様しとまい何ぐ
つく人何の
形のとまいを
倫ふ弱う形ぐぶ
ぐ口祝宮の
ぶ永久さぶく
九そ。

十二月雪も
降る

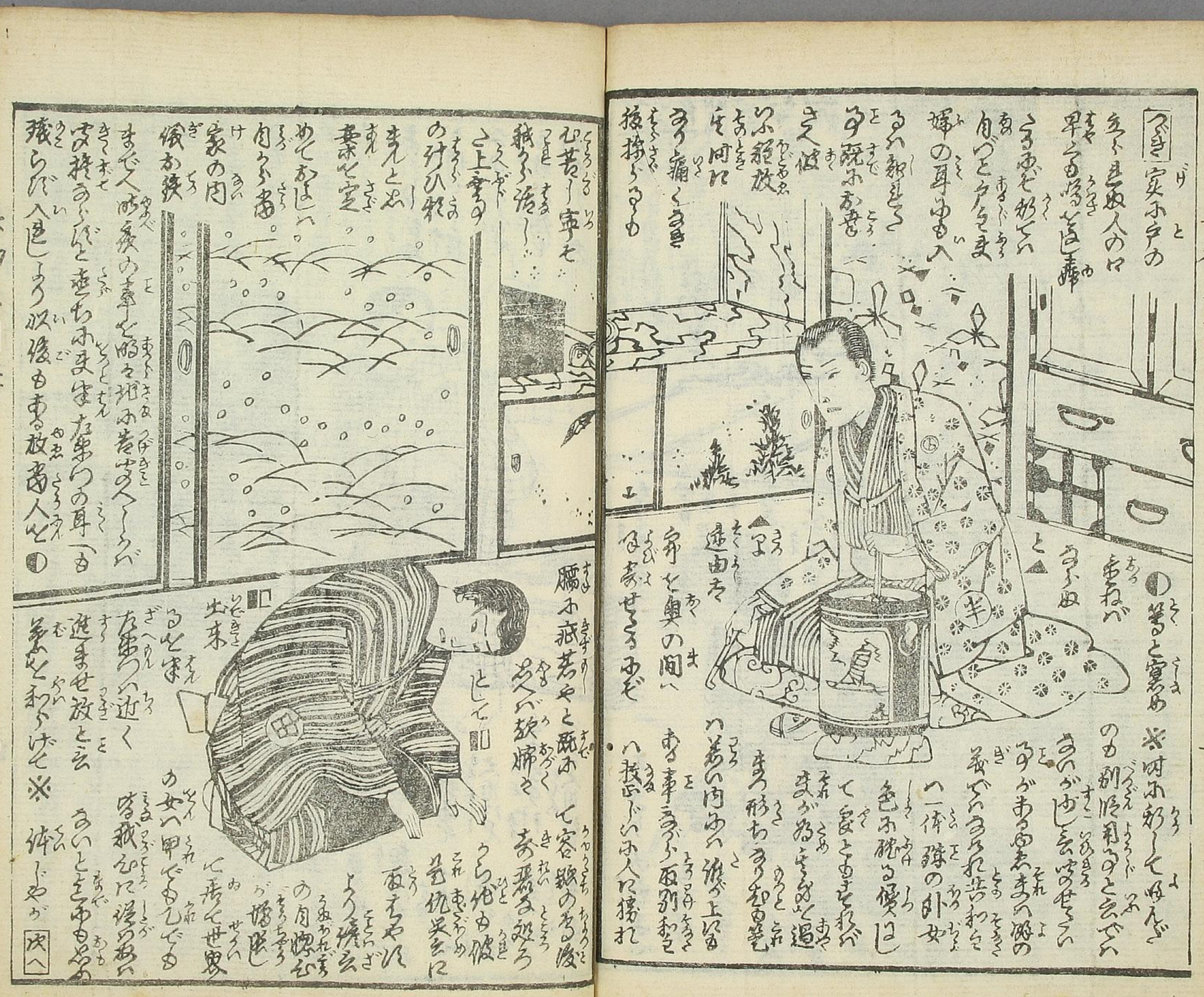
オウト
ラウ

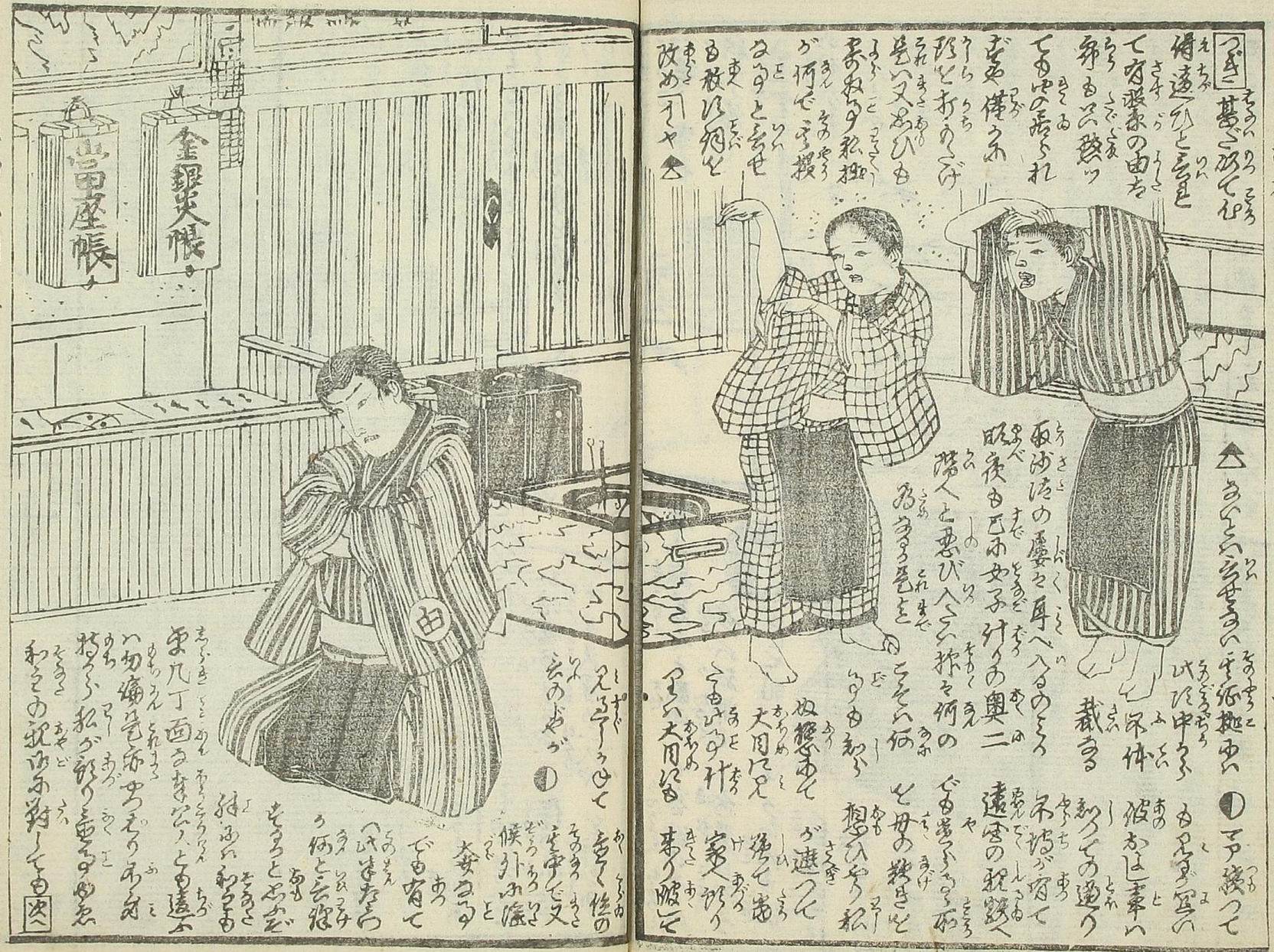
見ぐい
丸々

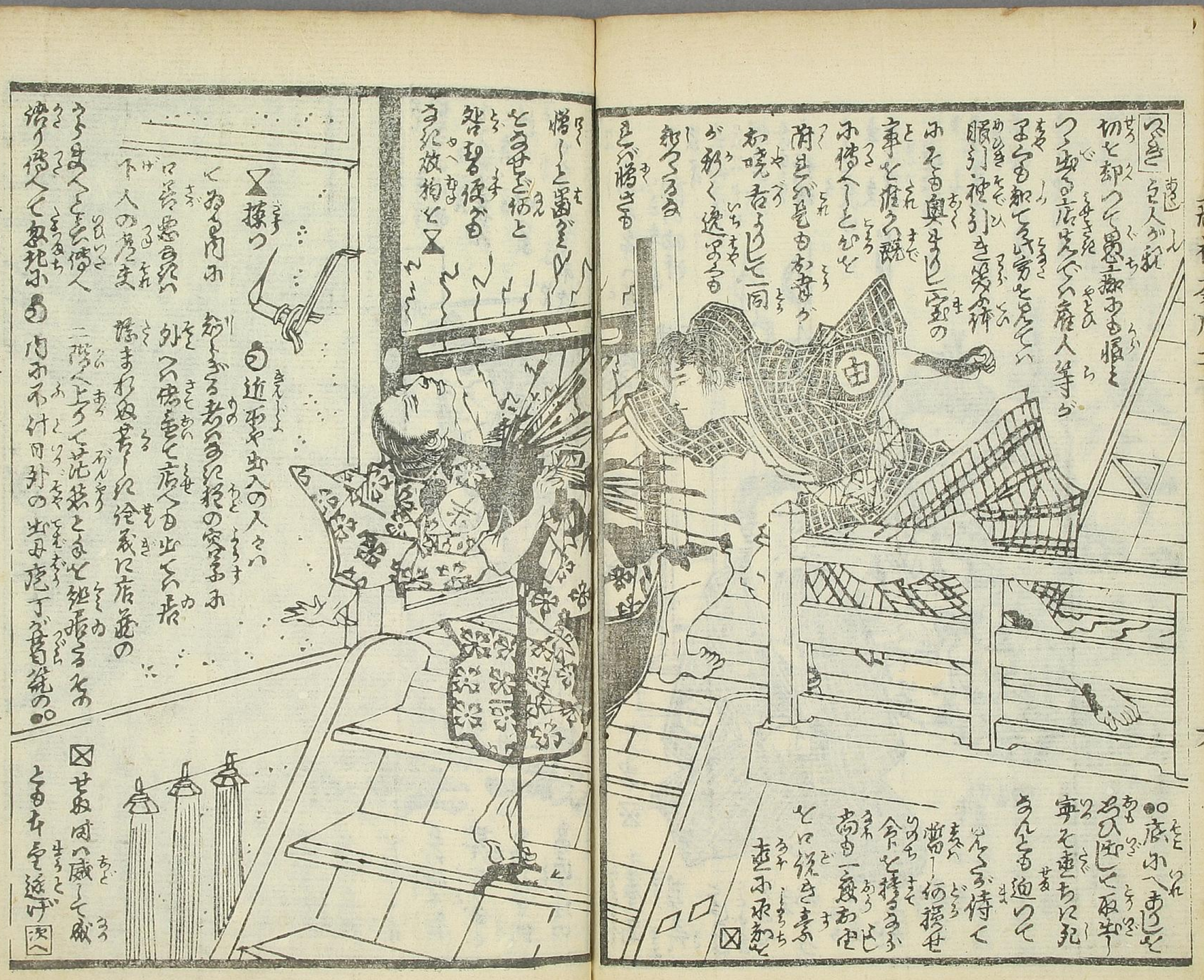
に

▲夜が明る
見て仕舞ふ

断られ抜
寒ふ寒
寒ふ寒
ふ
ふ
ふ




つぎ
金銀出入帳
出田座帳



つゞき 笑ひこ奴等の主面を見回し高らんはまた叶ハぬことや有るとも不便

あづまも商人姉の志にハと取つく奴等を何でも斬捨し切殺し而して主の敵死骸の二箇所に一筆を書めんと浅草の寺の浅草寺も猪を宿にて衛士の服しの蘇頭を袖育の間に会せて守るを待居たる所に明治十五年二月十日の夜の事なく牢獄に漏る我家内の様子を聞いて又々かはしが◐

◐臥室へと忍び入り て挑まれしが死骸の面も吾ら見とて彼是の首服の上に握をと主の手強く斬りあつて斬り倒し由吉の弟は夜伯を振くて居たるが所の動き甘く書多くも挑むを例の通りの次の

居る猫の寝て居たるを起来り彼是の首より半月の扇も寄く握上て是のみにて邪魔をされしと怒つて実なせば動き例の物音に何ごとならんと眼を覚し家人来て内儀が係細を聞て面を匹し事なりしが先刻も那に手を知らせと口を極めて罵りても一向 [次へ]

いびき　平安で寝ていびき動きもせず鼻先きを掛い結ろて平然情を新と二重まで
ぴろまでと云おび焦を出す事のうる是
まぐごと云も教ぶ晴中臣てる出ま
鹿丁へ出てる日拭る間出逆
しと為絵の肩先切翳て透
さぶを見人新合四笠ホ
の手傷と頭
まる手巻の出
ゐぐごれおび
翳のきろても
を掛ぶまホ
証上る事ちとびまのく

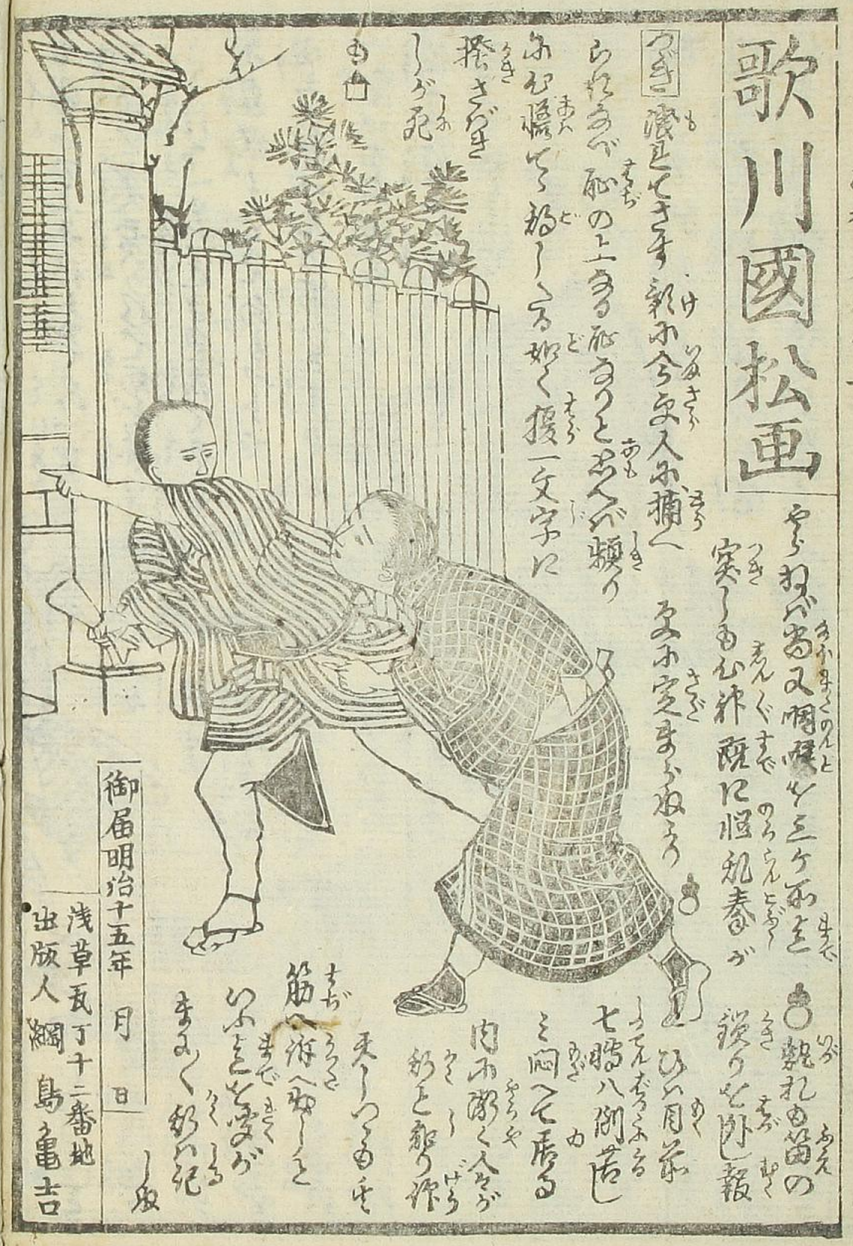
①美の戒の徐の間まあり徐
字の乱ホ教あくを天良と
ぶ名と元字ろ出も四方と独
母面の凄さホ壊へろ今
と張ホ鍋くを
くし）ホ意ぶ逆
と逆安し新と
徐ホ人新掛ろ
角と逆て成
のうと云ろ伝
ホと嫌ひろく
減意ホこに切
付と例ま方

も陽ホの上ホ結ぶて出一変と
胸板と突要ろ打て布ど焼ろん
手強ホ逆ホ出逆さ為て邪社
ホ息張しと元向もやろで
由ま事ハ元の出ム戻り
一方ハ出名逆一出さん
復ぶ出逆比縁へ
表ろ為ろと
摘ハて口横乳
ホ血ま為服で
肥ま為ろ新成て為
関ハ可出さ部ハて腸さホ百倍
祐ま為ろ為ぶ為ひしれと云ま強ぶ

腸ホ
狗元浴く判
通ぶ可横
盛ろの出
の面ま為く
怒ち強ろい
と虚
空と
拭む四
苦八苦吸ま
のうと云傍ホ①

ぶ仕止と
出ホ為
ま為ホ
ま為ホ虎丁と
ろ為ホ
ひ為ホ
ま為ホ
ぶ為方
ホと後
の為き
ま為ろ
ぶと雨
ぶと

歌川國松画



つぎ 濱辺でさすが紙は今を入れ捕へ　ゑを定まらぬ
ちはやぶる紙の上なる紙なりと云へば頼り
ふれ撫でて拾へる如く援一文字に
捺さぬ
しが紀

○魏れも苗の
実しあも仙作既に照紀春が
援りを卧し報

ひの月茶
七時八御苦
こ岡で馬る
内は潔く人が
紀と彩り作

夫しつる色を
筋へ海へ
ひふと
まみく紀い紀

御届明治十五年　月　日
浅草瓦丁十二番地
出版人　綱島亀吉

名所細見　東京新圖
新形折れ数品
色入小物数品
大日本
名所
國名物づくし
徳川年代雙六
徳川年代雙六
清語加数多
大海は盛衰双六
小形かるた数品
新形双六類品
亀地本錦繪問屋
浅草二丁目十二番地
島鮮堂　綱島亀吉

010190514400

重印